

第1群（活動報告）

青年期（ひきこもり）家族会の振り返りからの一考察

発表者（筆頭演者）所属・氏名 精神保健福祉センター 技術主査 武者恵

水本有紀，粕谷祐子，川村典子，石濱かおり，岩崎みゆき，加塩涼子，熱海怜子，松田祐子，小原聡子

キーワード: ひきこもり対策，家族会，家族のエンパワメント，地域での展開へ

I はじめに

宮城県ひきこもり地域支援センター（以下「センター」という。）において，平成 25 年度から 28 年度に実施したひきこもり家族会を振り返り，これまで家族会を利用した 52 名のひきこもり当事者の状況やその家族の参加状況等を分析し，センターの家族会の特徴と県内のひきこもり支援体制の充実に向けた今後の方向性について考察したので報告する。

II 方法

センターは平成 26 年 1 月に開設され，現在は総勢 8 名（平成 29 年度までは総勢 9 名）の精神保健福祉センター職員が兼務して運営しており，平成 29 年度までは，個別相談を中心に担う班と家族会の運営を行う班の 2 班が連携して実施していた。センターにおけるひきこもり支援は，個別相談と家族会の両面で支え，情報共有しながら平行して支援することを基本としている。家族会は，平成 18 年度より家族のひきこもりに関する知識の習得や家族が集うことによる孤立感の軽減，家族自身のエンパワメントを目的に，毎月 1 回センター内で実施しており，家族会の利用に際しては，インテーク面接を行い，センター内の受理会議でアセスメントや支援方針を決定したのちに開始としている。参加者は，個別相談の中で相談担当者より家族会を勧められ利用に至る例が多い。

家族会は，講義と家族同士の交流を組み合わせた形で実施しているが，4 年間で，時間構成やプログラム内容，スタッフ構成等を工夫・変更しながら運営した。新しく家族会に参加するようになった家族は心理教育やひきこもりの理解の場としての『家族教室』と，家族会に長期間参加している家族は，自助グループ的フリートークを主とした『家族の集い』に分けての運営を試みた時期もあったが，『家族の集い』メンバーより講義を受けられないことについての不満の声が出されたことや参加人数の減少もあり，1 グループに統合した経緯もある。

今回は平成 25 年度から 29 年度まで実施した家族会について整理・分析を行った。

III 活動内容

4 年間で実 52 家族が参加した。毎年実 23 から 31 家族が参加しており，1 回平均参加者数は 13.1 から 17.8 名と幅があった。新規参加者は，平成 27 年度までは増加したが，平成 28 年度は 2 名であった。参加者内訳としては，母親の参加が約 70% を占め，父親の参加は約 25% であった。約平成 28 年度末の時点で，21 家族（40.4%）が家族会を継続しており，31 家族（59.6%）が終了していた。52 家族の居住地は，24 家族（46.2%）が北部（大崎）であった継続している 21 家族の居住地は 13 家族が北部（大崎），東部（登米）・北部（栗原）・仙台（黒川）・仙台（塩釜）が 2 家族ずつであった。終了した 31 家族のうち 13 家族（41.9%）が見学のみ（1 回）で終了しており，5 回未満で終了しているのが 17 家族（54.8%），10 回未満で終了しているのが 28 家族（90.3%）であった。就労・就学によって終了した 6 名の特徴は，ひきこもり年数も短く，若年の方が多く不登校歴があっても，高卒後であったり，就労経験があつたりと多少の社会経験があつた。また精神症状が認められない方が多かつた。家族は平均 6 回参加し終了していた。当事者のひきこもり年数でみると，継続している 21 家族では，15 年以上の方が 9 名（42.8%），終了した 31 家族では 6 名（19.3%）であり，ひきこもり年数が長い方が継続していた。

IV 考察

センターの家族会は心理教育の場とし，個別相談と連動した支援を実施している点が家族会の特徴と思われる。参加回数の期限を設けずに支援をしていることから，家族同士が顔なじみになりやすく，経過の長い家族が参加し，ひきこもりが長期化している家族のエンパワメントの場になっていると思われる。

V おわりに

センターは宮城県北部にあり，継続参加している方は近隣の圏域の方が中心となっていることから，今後は，ひきこもり家族が継続参加しやすいより身近な地域で学べる機会を確保できるよう，地域の実情を把握しながら，三次機関としてセンターが実施したプログラムを活用しつつ，地域の支援者の技術支援に力を入れていきたい。